

自分らしく生きるための挑戦〈後編〉

— 参議院選挙・平成7年&13年に起きた二度の奇跡

16位奇跡の当選

人生4度目になる挑戦は、平成7年に行われた参議院選挙です。ただその前に、私がパリから帰国した理由をお話しておかなければならないでしょう。

個人的にはこれ以上望むものも無いほど満ち足りていたはずのパリで、私は次第に心の隅で膨らんで行く、たまらない虚無感を自覚し始めます。この虚しさの原因は何なのか。答えは、誰の役にも立っていない自分の存在でした。

「人は誰かのために役立つこそ、真に幸福でいられる」

個人的には完璧に満たされていたパリの日々を経験したからこそ、それだけでは本当の幸福感を得られない人間という存在の本質を、私は知ることができたのでした。

そう気付いたからには、これ以上パリにはいられない。日本に戻って何をするあても無い私ではありましたが、とにかく何か世の中に役立つことをしなければと、アパルトマンを引き払い荷物をまとめて帰国することにしました。帰国前日にはさすがにアパルトマンの浴室で、シャワーに打たれながらワンワン声を上げて泣きましたが、涙も声もか嘎れるまですり泣き泣いたせいでしょうか、翌日はすっきりと未練を残すこともなくパリを離れることができました。

帰国後しばらくして、ある政党の研修会での講演を依頼されました。その政党の幹部だったのが、キャスター時代、番組で一緒に羽田孜元総理でした。久しぶりにお会いして近況報告などする内に、私の話の方向は、「なんとしても日本をフランスのような文化立国にしたいです」とすっきり陳情になっていました。

「それだったら畑くん…」

それまでうんうんとうなずくだけだった羽田さんが、ふつと顔を上げました。

「文化立国は大切な話だが、そんなに熱心に僕を口説くくらいなら、キミ、自分でやったらいいい」

政治にはどことなくアンタツチャブルなイメージを持っていた私でしたので、一瞬言葉に詰まりました。でも確かに他人にあれだけ頼んでおきながら、自分が実現のため努力するのは嫌というのでは道理が通らない。こうして声をかけていただいたのも何かの縁。では、ひとつやってみますかということ、新たな挑戦が始まりました。

ただ運命はまたしても、そうたやすく結果を出してはくれませんでした。

新進党から比例代表候補として正式に出馬を要請され、約束されていた名簿順位は5位。ところが順位の発表当日に告げられた順位は、なんと16位！。新進党の当落ラインは10位くらいと予想されていましたから、これはもうまったくの当選圏外です。結党間もなかった当時の新進党は、内情がかなり混乱していたようで、私より上位の方でも約束とかけ離

れた順位を提示されて立候補を取りやめた候補が何人かおられました。

普通に考えたら出馬したって恥をかくだけだから、黙って取りやめてしまうのが、日本の常識なのかもしれません。ただ私の場合は、取りやめるにしろ、出馬するにしろ、とにかくなぜこんな約束とかけ離れた順位になってしまったのか、その理由を納得がいくように責任者からきちんと説明してもらわない限り、前にも後にも動けません。一人でも態度を保留していると比例代表名簿順位の正式発表はできませんから、新進党からの発表はとりあえず翌日に持ち越しとなりました。

とにかくこれまで官公庁などの公的な仕事やそれに準じる堅い仕事ばかりをしてきた自分にとって、政党の公認を受けるということは、すべての仕事ができなくなり生活の糧を失うということを意味します。それだけの覚悟と犠牲を払っての出馬であることは、党側にも事前によくよく説明していたはずでした。にもかかわらずの16位。

その夜はベッドに入っても、結局一睡もできませんでした。ボーツとした頭の中で、同じようなことが走馬灯のように何回も何回もリフレインしています。やがて朦朧とした意識の中で、「順位が何位であろうと、一度世の中のために役立ちたいという志で手を上げ

たからには、その志が変わらない限り前に進まなければならぬのではないか」という考えが浮かんできました。そう思うと、荒れ狂っていた心が不思議に穏やかになってゆくような気がしました。

翌日の朝、私は正式な出馬表明を行いました。

党の用意した会見場に行くと、「あんたのために昨日一晩、徹夜させられたんですよ」と、いきなり記者の方から毒づかれました。（私にとっては路頭に迷うことも覚悟した、修羅場の一夜だったのに……）と心の中でつぶやきながらも、「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」と、深く頭を下げました。

16位の出馬という討ち死に必至の出陣だというのに、世間は冷たいものだとしよげかかっていた私に、普段は口の重い父が一言、こんな言葉をかけてくれました。

「おまえは正しいことをしているんだ。だから胸を張って堂々としていればいい」

実は前夜、順位を告げられた後も、父は一晩中党本部と私の事務所の間を往復してくれていたのです。党本部ではずっと立ったまま事の一部始終を見守り、記者の方々に詰問

されながらもじつと耐えてくれたのだそうです。選挙が終わった後、党の事務局の方からその話を聞かされました。

そんな思いが天に通じたのでしょうか。その年の参院選では新進党に神風が吹きました。10人がやつとと言われていた新進党の比例代表は、結局、18位まで当選することができました。こうして落選確実だった16位の私は、まったく予想も期待もしていなかった奇跡の当選を果たすことができました。

奇跡の20万票

ここで紹介させていただく話としてはこれが最後となる5度目の挑戦は、私にとって参議院議員二期目を目指しての平成13年の参議院選挙です。結果は当選こそしなかったものの、党からの公認も組織団体の応援も何一つ無い中、私の政治信条を支持してくださった皆さんのボランティアとカンパだけで20万票を上回る奇跡の大量得票を頂戴し、前回の選

挙以上に感動と学ぶことの多い挑戦でありました。

私の政治信念における第一は、利権団体の組織票や組織的な資金を集めての選挙は絶対にしてはいけないことです。なぜならひも付きで当選してしまえば、国民全体の利益とその利権団体の利益が相容れなかった場合、利権団体の利益を優先しなければならなくなるからです。そうしたことの繰り返しですべての政治腐敗の元凶であり、それを正すために自分は政治に身を投じました。にもかかわらず、自分が当選するために利権団体のお世話になったのでは、ミイラ取りがミイラになったも同然です。しかしこうした考え方は、自民党執行部からはまったく理解してもらえず、組織的な票や資金を出せる支援団体をつけなければ選挙での公認はできないの一点張り。結局、自民党の公認はおりず、立候補するなら無所属で出馬せざるを得なくなりました。無所属ですと比例代表選挙には出られませんので、急遽、公示まで2ヶ月を切っている中、東京選挙区から立候補することを決めたくてです。

しかし一口に東京選挙区と言いますが、衆議院の小選挙区だけでも都内に25もあるんで

す。単純に計算したら、選挙の規模と手間は衆院選の25倍。選挙が近くなると街角に立てられるあの公営掲示板だけでも、都内に1万3733ヶ所ありました。夏の真つ盛り、公示と同時に一齐にポスターを貼るだけで、気が遠くなる作業です。大政党があらゆる団体に圧力をかけ、何億円という巨費を投じて文字通り総力戦で戦わなければ、要するに選挙自体が成り立たないことを、自分が参議院東京選挙区に挑戦してはじめて痛感しました。

でもそうした戦いに、私はあえてたった一人で、ボランティアとカンパだけを頼りに挑むわけです。その姿はまさしくドン・キホーテ。

それでも絶対にやるんだと本気になれば、思いは天に通じ、なんとかこなしてくれるものです。私のこんな無謀な挑戦を感じてくれる人たちが次々と力を貸してくれたお蔭で、たった2ヶ月弱の準備期間にもかかわらず、どの候補者よりも個性的な選挙カーができ、渋谷の公園通りに事務所を開くこともでき、ボランティアの学生さんも集まって、なんとか選挙の形が整いました。

選挙公示日、ハチ公前で誰よりもちっちゃな選挙カーの上から第一声の演説を行った時

には、とにかくなんとかここまでこぎつけたこと自体がもう奇跡としか思えず、突き抜けるような夏の青空を見上げ、思わず涙ぐんだものです。

参院選はいつも7月下旬と決まっています。特にこの年はとびきりの猛暑で、連日37、38℃は当たり前。でも不思議と候補者本人は全然暑くないんです。協力して下さった方々には申し訳ないのですが、精神が集中してテンションが上がり切っているせいでしょうか、選挙中に暑くてつらいと感じたことは一度もありませんでした。

でも、気温の上昇とともに私たちの陣営にも風が吹き始めます。当初はまったくの泡沫候補としてしか扱われず、マスコミの記事でも嘲笑的なものが大勢だったのに、事前の世論調査での票が伸びてくるにつれ、私の政治姿勢を評価し応援してくれる記事も段々と増えて行きました。選挙も終盤になるとひよつとすると当選ということもあるので、大手新聞社の政治記者が事務所に問い合わせてくるほどになりました。

ただそんなことよりも、とにかくこの時の選挙戦の楽しさと言ったら、ありませんでした。これまでの人生でこれだけ手放しに楽しかったと言えることはなかったのでは、とそう思えるほどです。

連日40℃近くのおだる暑さの中、法定で選挙活動が許される朝8時から夜8時までびつしりとほとんど休むことなく17日間、小さな選挙カーで都内をくまなく遊説に回るのです。それで一体何がそんなに楽しかったのか、いまだに私にもよくわかりませんが、ともに大量の汗を流してくれたボランティアのみんなも、とにかく口々に「本当に楽しかった」と今でも言ってくれます。

ボランティアで協力してくれた人たちの多くが、就職活動の一段落した学生さんでした。皆、少ない睡眠時間と猛暑そして疲労のトリプルパンチで、選挙戦も終盤になると食事も喉を通らなくなるほど困憊しながら、それでも毎日、まるで「選挙運動」という運動部の部活動のように活気と笑顔と笑い声がたえない日々でした。

私の演説中やねり歩きの最中に、ピラ配りのためよく動き、よく声を出してくれたのはもちろんのことですが、移動中の選挙カーの中でも、誰ひとり休むスタッフはいません。ウグイス嬢として自分がマイクを握っていない時には、窓から身を乗り出して、対向車や前後の車に飛び切りの笑顔で力いっぱい手を振ってくれるのです。疲れて暑くてもう意識も朦朧としていても、誰に強制されたわけでもなく、皆がそうしていました。

遊説ではよく商店街を回りましたが、大きなマイクの音で随分とお騒がせしたにもかかわらず、どなたからも温かい笑顔と励ましの言葉を頂きました。時には冷たいお茶を入れてくださったり、下町ではお店の商品であるおせんべいや人形焼などの差し入れまで頂きました。

正しいと思うことを正しいと全力で訴えることが、こんなにも楽しくて生命力を与えてくれることであることを、スタッフや有権者の皆さんから身をもつて教えていただいた、何にも代えがたい貴重な選挙戦でした。

結果は2万500余票を獲得し、第6位。4位までが当選ですから結果はたしかに落選です。いくつかのマスコミは、私の結婚が落選の理由であるかのような報道を飽きもせず繰り返していましたが、そんなくだらない陰口には、私の満たされた気持ちや傷つける力のみじんもありませんでした。なにしろ20万人以上の有権者の方々が、何の見返りも求めず、純粋に私の政治姿勢に共感してくださり、40℃近い猛暑の中、投票所まで出向いて一

票を投じてくださったわけですから、こんな政治家冥利に尽きることはありません。本当にありがたい経験をさせて頂きました。

たとえ結果がすぐに出なくても、挑戦することによつて得るものは必ずあります。恥をかいても、傷ついても、純粹な志をもつて真摯に事に当たれば、挑戦しただけの成果はいつの日かまちがいなく返ってくる―そう信じられる力を、それぞれの挑戦は確かに残してくれたのです。